

タヌキ雑感

南原充士

タヌキは日本人にとっては親しみを感じる動物である。といっても最近では動物園で見かける程度で、犬や猫のように普段の生活の中で接することはあまりない。

(地域によっては今でも出没しているとの情報もあるようだが)やはり物語や小説などにしばしば登場することによって親しみを感じるようになったのだろう。

たとえば、かちかち山にでてくるタヌキは、残虐な老婆殺しだが、背負った柴に火がつけられてやけどを負ったり、泥の舟が沈んだりして遂には死んでしまう。

「証城寺の狸囃子」もよく知られた童謡であるし、また、「タンタンタヌキのキン〇マは・・・」などという歌も下世話ながら愛嬌がある。

タヌキ寝入りとかタヌキとキツネの化かし合いとかの表現もある。関東では、キツネは油揚げの、タヌキは天かすの愛称でもある。また、キツネとタヌキはインスタント食品の商標としても使われている。キツネそばとかタヌキうどんとかも庶民の生活になじんでいる。昔、大阪に行ったときに、「けつねうろん」を勧めてくれたおじさんがいた。おもしろいタイプだったが、私に変な人からまれそうになったときに大阪弁で啖呵を切つて助けてくれたのが思い出される。

夏目漱石の「坊ちゃん」に登場する校長も狸というあだ名がつけられている。

「薄髯のある、色の黒い、目の大きな狸のような男」だということかららしい。

札幌には狸小路という歴史のある商店街がある。諸説あるが、かつて狸が出没したところからつけられた名前らしい。今の北

海道では、キタキツネのほうが目撃されることが多そうだが。徳川家康も狸親父と言われる。今日的な家康の評価から見れば、いかなるものかとも思われるが、世間の見方は時代とともに変わるのだろう。狩野探幽が描いたとされる家康の肖像画は堂々たるものだが、三方が原の戦いで敗走したときに描かせた「しかみ像」は憔悴したようすをしている。その後もそばに置いて戒めとしたとされている。

蕎麦屋の店先にはよく編み笠をかぶって酒瓶をぶら下げたタヌキの像が置かれている。なぜ蕎麦屋とタヌキが関係があるのだろうか？

タヌキが登場する詩も多々あるが、例えば、谷川俊太郎さんの「ことばあそびうた」のなかに「き」という詩があり、その最終連は、次のようになっていっている。

「なんのき ああきの／ああきは たぬき／げけ そこなつて／あおいき といき」

このほかにもタヌキが引き合いに出される場面はいろいろあると思うし、そのイメージも変化していくだろうと思うが、タヌキはこれからも日本人の生活の中で生き続けるだろうという気がする。

灰皿町富士見一〇番地